

今年から Coaches Commission のメンバーに入りました。ISAF 会議はこれまでオブザーバーで参加してきましたが、初めてメンバーとして会議に出席しました。

Coaches Commission というのは委員会ではなく、Executive Committee に直接報告をする部会です。Athelete Commission と同様に、コーチ側からの意見をまとめて問題提起、解決策を考えていきます。

1) リオ五輪 Update

- ・本番に向けて Marina da Gloria の施設は 3 月に完成予定
- ・水質対策として、予備エリア x 2 を含む合計 7 エリアを想定し、雨天のごみ流れ出しに対応する。
- ・本番はスケジュールを伸ばし、予備日を 1 日追加した。
- ・レースの前出しができるように NOR と SI を変更する。
- ・朝の北風で 10 時に 1 レースする案もあるが、本番は TV 中継が 13 時からなので、考えない。

2) Support Regulations (Coach boat Regulation の発展版)

- ・争点は 3 点。①Zone ②Weather Instrument ③Mobile 等コミュニケーション (SIM)
- ・携帯電話は不可。VHF77 のみ。
- ・Zone は V 旗でコントロール。中のエリアは No.
- ・オリンピックは Media Boat Guideline に従うので、プレ大会とは異なる。

3) 今後の大会

- ・大会主催者側で気象ブイデーターを公開することにより、コーチボートが独自にデータをとる作業を激減することが可能。→ISAF から組織委員会へ文書で依頼が必要。必要経費は各国からのデータ申込みで負担する。東京から取り組めないか。
- ・コーチ登録 →ワールドカップ同様に国際大会のコーチは ISAF へ登録制度にしていく。ユースワールドも事前登録として、コーチの ISAF ID を検討中。現状は Sailors ID を併用。
- ・サポートメンバー (OP の父兄も含む) の問題が増え、69 条を適用させること、コーチ・サポートスタッフもヒアリングに呼ぶ、罰則がない場合は担当する選手にペナルティーを課すなど、今後のルール変更を検討

4) Day Zero について

- ・ワールドカップでは計測をせずに、本人の責任でルールに従うことを義務づけている。Day Zero が始まってから、スポットでチェックをされて違反が見つかるケースが多々あり、メジャーがない国からは不満が出ている。→簡素化した計測は進むべき方向。ルールを読まない選手のほうが問題。継続することによって選手の意識が変わり、自らチェックするようになることが目的。

5) O 旗について

- ・フィン、470 は特に成功している。ユースセーリングにも浸透しはじめた。スポーツとしてのセーリングとして価値があがる。
- ・レーザーは O 旗・R 旗にすすむ道はないのだろうか。

6) ワールドカップの将来

- ・2015 年 SWC の前半は成功、後半は息切れ、ファイナルは不振。
 - ・パルマ、メデンプリックは予選として役割を果たし、好評。エリートに制限するしくみは良かった。
 - ・年間の大会数が多すぎる。移動（特に艇の輸送）が追い付かない。スケジュールに無理があった。
 - ・もっと異なる視点から考えてはどうだろうか。→2 日間、集まる時間を作って意見を出し合った。
- ① 大会回数は 2 年間で 6 回。毎年という流れをやめる。例えば、2016 年 1 月にマイアミ、5 月にイエール、9 月に青島、2017 年 1 月にメルボルン、5 月にウェイマス、9 月に日本、12 月にアブダビでファイナル。ファイナルには各大会の 3 位までのチームとクラス別世界選手権の 3 位まで。表彰台にのった人だけがファイナルへ進み、ファイナルのみ賞金レースとする。2018 年は ISAF ワールド、2020 年はオリンピックがあるため、ファイナルはやらない。
 - ② ファイナルはやらない。年に 3 回だけやる。オセアニアとマイアミが交互、欧州の大会が交互、東京がある間のアジアは東京。2020 年以降はフォーマットが大幅に変わるだろうから、修正が必要。
 - ③ ISAF がカレンダーを調整しようと試みている。クラス世界選手権もこれまでのような BID と選挙で決めるのではなく、スケジュール調整をしっかりと組み入れて輸送の負担を減らすようにしていくことがよい。

以上 （委員長の Alain Champy より EC へ報告）

以下、私見です；

ユース五輪の種目から考えられるセーリング競技の将来像

2018 年アルゼンチンのブエノスアイレスで開催されるユース五輪の種目が、テクノ 293+ 級男女、カイトボード男女、ナクラ 15 男女混合の 5 種目になるそうです。ディンギーがなくなり、年齢上限も 18 歳へと高くなりました。この決定までのプロセスを聞いたところ、IOC がセーリングに求めるのはスピード、誰が見てもわかる競技、ダイナミックであること。

Sports Presentation として、セーリングを考えた時、決勝→メダルレース→1位でフィニッシュした艇がなぜ金メダルではないのか。非常に単純な考え方ですが、結果がわかりにくいことを指摘しています。水泳や陸上のファイナリストは、決勝で1位をとった人が勝ちます。セーリングは採点競技ではありません。得点を重ねて競り合いを制しても貯金ができるから、見ていておもしろくないといえます。最初から勝つことが決まっているメダリストが、メダルレースに出るだけの決勝レースのどこが争いなのか。スポーツを観戦する上で、華やかなアクションが必要なのか、勝負が必要なのか。これまでのセーリングは自然を相手にするため、数多くのレースをやって、貯金を作ることができるように、どちらかというリスクの少ない戦いを尊重してフォーマットが定められていました。今年からワールドカップシリーズに加わってきたカイトボードはレースフォーマットが全く異なり、4-6艇で予選シリーズを行い、グループ上位が準決勝、決勝へと勝ち上がり、メダルは決勝レースの1位が金、2位が銀、3位が銅、4位はSORRYと、4選手が直接対決で勝負を決めます。実際に見る機会がありました。アブダビでのフィナルレースはスタートから1マークで優勝候補のイギリスが2位とタングルしてしまい、スペインがたなばたで勝ちそうな展開でした。でも、風がその後、ぱたりととまり、残りの2名もカイトが墜落。ノーレースとなって、風がまた吹いてくるまで待ち、仕切り直してレースしました。カイトのコースレースはわずか4分半ほどで、スタート前も助走で直線を走ってくるし、タングルしないように相手と距離をとるし、まっすぐ走る時は何もアクションがないし・・・実に単調です。それでも、1発勝負というところに緊張感があり、見入ってしまいました。勝ったのはイギリス。自然の力に助けられ、やり直しになったおかげでの優勝です。

マッチレースでもおもしろいのは、Do Or Die という状況です。球技では予選リーグと決勝トーナメントがあり、見ごたえがあるのはトーナメントに入ってからです。セーリングにも、一発勝負の要素や、逆転神風的なフロック勝利があっても、それがセーリングの面白さになるのかもしれませんが。往年の名選手は嫌がるかもしれませんが、若いカイトの選手達は最初からそういうものだと思います。

IOC がセーリングに提言しているのは、2018年のユース五輪を使って、新しいセーリング競技のフォーマットを試みなさいということ。そして、2020年の東京が終わったら、2024年には種目もフォーマットも大幅に見直して、新しいセーリングとして2024年のオリンピックを迎えるようにということ。

同様に Equipment Committee では EVOLUTION という言葉がキーになっています。リオと東京とでは種目の変更がありません。従って、艇種変更はできないけれど、ナクラ17のルールを変更して、フォイリングできるダガーに改造してはどうか。江の島の海でナクラをフォイルさせようとしています。

大陸予選のしくみは効果があり、アジア、アフリカでは国が増え、少しずつレベルがあがっています。470男子では南アフリカが2015年世界選手権で国粋を獲得し、アフリカ予選での1枠を狙って他国の取り組み方が変わりました。シングルハンドのクラスは Evolution よりも、国数の拡大への役割が重要です。ただ参加するレベルではだめで技術上達のプログラムが今後要求されていくでしょう。日本でスタートした Sports for Tomorrow もアジア、アフリカ、中東の国々が興味をもっています。

フォーマットと、Evolution — 改革は始まっています。今後の ISAF のかじ取りに、しっかりとした意見をもって対応していきたいと思います。